

健健土  
民

酪農学園後援会会報

第 94 号

発行 平成21年6月10日  
 発行者 永田 享  
 江別市文京台緑町582番地  
 財団法人酪農学園後援会  
 TEL 011-386-1195  
 Eメール:rg-koen@rakuno.ac.jp  
 印刷所 (社福)北海道リハビリ



三つの夢の話



学校法人酪農学園  
 理事長 麻田 信二

(はじめに)

還暦を過ぎて、これまでの自分の歩みを振り返ってみると、一九五五年から二年間の酪農畜産課長時代が大きな転期だった。北海道職員として、農業行政に携わり、農業を土台にした理想の社会を作りたいといつも考えていたが、農政部農政課の課長補佐となつて、農政企画の仕事を担当することができ、次に、農政部農業企画室において、北海道農業の長期計画である「北海道農業・農村のめざす姿」策定の責任者になり、その後酪農畜産課長に就いた。

この間、北海道開発の歴史や各

種の提言、関連する書籍や資料に接し、また、国際交流の分野も担当していたので、大学時代の恩師である石塚先生が尊敬していると云っていた佐藤貢さんに出会い、隣席で飲食を共にする機会も幾度かあつて、ミミズや有機農業の話などの経験談を聞くことができた。また、北海道開発の歴史などを調べる中で、北海道開発審議会の会長を務めた黒澤西蔵先生の考え方を知ることが出来たし、大正時代にデンマークから酪農家を招聘した宮尾舜治道庁長官の農工両全政策などを勉強した。

そうした中で、二十一世紀の北

海道の理想の姿として、有機農業、グリーン・ツーリズム、デンマークの三つのことに行き着つた。そうして、将来の自分の生き様を想像したときに、有機農業に直接関わりたくと考え、酪農畜産課長のときに長沼町に農地を取得し、道庁退職後の準備をはじめ、二〇〇六年三月に副知事の職を辞し、果樹農家になった。



麻田農園全景

道庁を退職して三年が過ぎたが、この間、この三つの事柄が大きく前進してきたことはうれしい限りである。原稿執筆の機会を得たので、その内容について紹介する。

1 有機農業について

昨年五月、酪農学園に私を訪ねて来た人から、私を取り上げた新聞記事とともに、古い新聞記事が

数点含まれている冊子をいただいた。その中に、佐藤貢酪農学園理事長を取り上げた、一九九一年(平成三年)三月二日付け北海道新聞の切抜きがあり、「農業が危ない」「元雪印乳業社長、健土健民を説く九十三歳・佐藤さん」「有機農法の先駆者札幌で明日講演」とあり、「北海道農業への熱い思いを語る佐藤さん」の文で写真が掲載されていて、懐かしく拝見した。

有機農業については、大学時代農業化学講座に属していたこともあり、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」や昨年亡くなられた福岡正信の「わら一本の革命」や「無三部作」、一九五〇年酪農学園から出版された「黄金の土」の原書を元に農文協から翻訳出版されたロディールの「有機農法」などを読み、大いに触発されていた。

しかしながら、私が携わっていた農政の下での農業は、化学肥料や農薬を沢山使い、収量を沢山上げられればよいという農業であり、有機農業に取り組んでいる人たちは、行政からも農協からもあまり相手にされない存在だった。

そうした中、私が酪農畜産課長になった年の十二月、北海道自治研修所から、雑誌への原稿依頼が

あり、北海道の行く末を深く考え、「農」が創る北海道ライフを提案する」(ほっかいどう政策研究一九九六・三第六号)という八千字ほどの一文をまとめた。その中に、「北海道は、世界に先駆け、有機農業宣言を」と書いたところ、これを読んだ有機農業者などから大きな反響があった。

その後、農政課長、農政部次長、農政部長と農政部の施策立案でリーダーシップを発揮できる立場に就いたことから、有機農業の推進を北海道の施策にしっかりと位置付け、公的試験場では日本で初めてと思うが、道立農業試験場で有機農業技術の開発研究にも着手することが出来た。

そんな中、私が副知事になって一年目の二〇〇五年三月、日本の食料自給率を高めるための緊急集会が有機農業に取り組んでいる生産者、流通関係者、有機農業に関わる大学教授などが集り、東京で開催されることになった。この集いで、私のメッセージを北海道有機農業研究会の事務局長に代読してもらったところ、全国から集まった参加者に北海道の取組みが注目を集めた。

その集会は、翌年から、「農を変えたい!全国運動」として開催

されることになり、それが有機農業推進法の制定を求める運動につながり、超党派の有機農業推進議員連盟(二〇〇四年十一月設立)の活発な活動もあって、二〇〇六年十二月に、議員立法として、全会一致で「有機農業の推進に関する法律」が施行されるという画期的な事態が生じた。

二〇〇七年三月、第二回農を変えたい!全国運動の大会が滋賀県立短期大学で開催され、パネラーの一人として参加したところ、第三回大会は北海道で開催されることになった。

その時は、酪農学園の理事長になるとは思いも寄らなかつたが、北海道で大会を開催するのなら、酪農学園大学しかないと考え、谷山学長を訪ね相談したところ心好く大学での開催を引き受けてくれた。

二〇〇八年三月に道内外から七〇〇名を超える参加者で、酪農学園大学の先生方の大いなる協力があり成功裏に開催できた。

そして今年二月、愛媛県今治市で第四回農を変えたい!全国運動の集いが開催されたが、それに合わせて、新たに有機農業推進地域連携会議が、コウノトリを自然に戻す活動を行っている兵庫県豊岡

市長が呼びかけ人の代表になり設立され、年に一回集まり、有機農業を推進するための意見交換と国への政策提言を行うことになった。その会の会長は、大会が開催される自治体の首長が持ち回りで当てることになり、私が副会長として、理事会の実務を執ることになった。私にこうした役回りが来たのも有機農業といえは酪農学園大学という評価が関係者にあるからであり、有機農業の推進に貢献できることはこの上ない喜びである。

## 2 クリーン・ツーリズム(2)

酪農畜産課長に就いたとき、北海道農業協同組合通信社から、特集「農家民宿V成功への条件を探る」に執筆を依頼され、「農家民宿の意義と役割」(一九九五年ニューカントリ八月号)という一文を寄せた。一九九五年四月一日からWTO(世界貿易機関)の新しい貿易秩序の下で農産物貿易がスタートしたが、北海道農業はこれにより大きな影響を受けることになるので、農家収入確保の新しい手立てとして、また、北海道観光の魅力の一つとして、グリーン・ツーリズムに地域ぐるみで取り組みことの必要性を考えていた。北海道農業は一九六一年に施行

された農業基本法に従い、経営規模の拡大が進み、酪農であれば、EU並みの規模に達していたものの、プラザ合意による円高もあり農産物の内外価格差は大きく、国際競争力の強化が求め続けられていた。その中で、農産物の政府支持価格は、一九八五年をピークに毎年引き下げられ、農業所得確保の環境は厳しさを増すばかりであった。農業の衰退は北海道の衰退につながる事から、北海道の将来を考えると、北海道の恵まれた食と自然を活かした取組みが必要だった。

また、二十一世紀は交流の時代になるから、定住人口が減っても交流人口を拡大し農村の活性化を図るべきとの提案もいろいろなされてきたことから、グリーン・ツーリズムを北海道の専業農家の新たな基幹作目の一つにしてはどうかと考えた。

一九九六年に自宅を建て移住した長沼町は、グリーン・ツーリズム特区を取得し、道外から修学旅行生を受け入れて五年目になる二〇〇八年度は四千人を超える中高生を受け入れ、私が経営する麻田農園も参加している長沼町グリーン・ツーリズム運営協議会が、農水省などが主催するオーライ!ニッ

ボン大賞を受賞した。  
麻田農園では、ブルーベリーの観光摘み取りと直売所での販売、ジャムやソースの加工品作り、それに、昨年から修学旅行生のファームインにも取り組むことが出来、酪農畜産課長時代に書いたことを自ら実践できていることに満足している。



農園のブルーベリー

受け入れ農家の人たちの生き生きとしたグリーン・ツーリズムの取組みを見てみると、こうした取り組みが全道の農村に広がっていくのが楽しみである。

### 3 デンマークについて

私は、網走市で酪農と畑作を営む農家の次男として生を受けた。小学生の頃、父の書棚にあった八

雲町の酪農家太田正治さんのデンマーク実習レポート「私は見たデンマーク農業」（デイリーマン社発行）を見て、デンマークに対する強い憧れを持っていた。

また、兄が農業の後継者となったことから、大学に進学させてもらい、農学部に進んだ。その大学時代に、恩師である石塚喜明先生から、授業の時に、年に一冊は哲学書を読みなさいと内村鑑三の教えを伝えられ、内村鑑三の「後世への最大遺物、デンマーク国の話」（岩波文庫）からも大きな影響を受けた。

そして、農政課時代に、北海道デンマーク会の会長であった佐藤貢さんに出会い、「北海道農業のめざす姿」の策定では、デンマーク農業のことも頭に置きながら、それまでとは異なる内容の計画を作ることが出来、マスコミや女性農業者からは好評を得た。

それから、酪農畜産や家畜衛生行政に全く経験のない私が思いもよらない酪農畜産課長になったが、そのことで、デンマークをさらに強く意識するようになり、一九九六年には、オーフスの農業センターを訪ねることが出来、多くの先達が北海道を東洋のデンマークにと言っていたことに、ますます確

信を持つようになった。



オーフスの農業センター

最近のデンマークは、デンマークの奇跡と言われるように、風力やバイオガス発電といった自然再生エネルギーのウエイトを年々高めながらその自給率は約一五〇パーセントにもなり、食料自給率に至っては、三〇〇パーセントを維持している。

また、国民一人当たりのGDPは、OECD三十カ国の中では、デンマークが五万六千ドルと六位、日本は三万四千ドルと十九位で、二万二千ドルもの開きがある。鉾山一つ無く資源に乏しいデンマークが、酪農学園の建学の精神として三愛精神の下、国の再生に取り組み、今日の奇跡を生んでいる。

今回の金融危機を契機に、日本の食料政策やエネルギー政策を大

きく変えるチャンスが来たと考え、北海道を東洋のデンマークにという先人の想いを、これからの講演活動などにおいて、自信を持って話せることは幸いである。

### おわりに

酪農畜産課長時代が、私にとって最も充実した時であった。憧れのデンマークを訪ねることが出来たし、長沼で有機農業を始めるために土地を求め、就農の準備を始めることも出来た。雑誌への寄稿なども数多く手がけることもできた。

大学時代は良き先生に恵まれ、民間会社に就職した回り道はあったが、それも良い経験となった。道庁退職後は有機農業に専念し、再就職はしないと決めていた所、想いも寄らなかつた、有機農業やデンマークと極めてかわりの深い酪農学園の理事長に就き、今日に至っている。

農業は天地の経綸に従って未来永劫続けていかなければならないものであるが、農家の次男として生を受けた私の人生は、ただ世の中の流れに従ってきたように思う。そして今、三つの夢の大きな前進を肌で感じる事が出来る幸せに感謝している。

## 失うものと得るもの狭間

そして、「見る前に跳べ」―新規就農相談員をして



全国農業会議所 新規就農相談センター  
非常勤相談員 五十嵐 建夫  
(農業経済学科三期卒)

「農業」がこれほど持てはやされる不思議な時代が来るとは考えてはいなかった。不気味である。農業が日本を救うと言うメディアまで現れた。事実、先に、東京で行った就農・就職相談会には、自治体・農業法人一五〇が出席したが、来客は一、七〇〇人以上であった。

切っ掛けはこの一〇〇年に一度の経済不況であろう。農業という業界への関心を持つ人のパイが大きくなった。このことが例えば就農率が変わらなくても、就農全体の数字に変化が訪れる事を願っている。これまで、無尽蔵の砂のなから、砂金を見いだす心境での相談であったが、今では、質的に異なるカテゴリーに属する求職者との相談である。現代社会を反映するリアリティのある相談への質的激変である。

持てはやされた後には、必ず反動が押し寄せる事は目に見えている。例えば、採用して農作業をしてもらったら、一週間も持たなかったなど、ミスマッチは世の常とは言えない状況なのだ。採用する側

も、雇用される側も両者ともに同じ地平にいるはずだ。多様な立場にいる相談者に教えられ、求人の内容が多彩になってきた法人に教えられていく。この事は、今後相談は未定でありつつづけるであろう事を予感させる。

先が見えない不安と戦うのが、起業だ。そこに価値を認め、戦略を構築できる何かの少しでも確信に近いものが見いだせれば、はずだ。

## 「見る前に跳べ」

危険の感覚は失せてはならない道はたしかに短い。また険しいここから見るとだから坂が険しい。みるのもよろしい。でもあなたは跳ばなくてはなりません。

だれもみている人はいませんが、あなたも跳ばなくてはなりません。

(オーデン)

何か新しい事をスタートさせるときにこの詩がイメージを喚起してきたものであった。今の、相談者にも言えると考えている。跳ぶ決意は容易ではない。決断する時、最も困難な事を選択することなのだと言う事が理解できるかに尽きる。日々、深い心の底を想像させてくれる。やり甲斐はあるか、将来の見通しはあるか、不安は必ず発生するわけで、これとの戦いである。世界的に見た日本の起業率(起業率)の低さを意識せざるを得ない。

どうしてこんなに「農業をやりたい」と自由に気楽に言えるようになったか考えている。三十年前には想像できなかった。言える雰囲気は社会全体になかったと言うのは、大規模経営になった野営生産者の声だ。かつて「勉強しないとあなるよ」と言う自縛から開放され始めたと言っている。今は、違う。堂々と語る時代になった。このことは大きな変化の一つだと言う。「農業はクリエイティブ」「農業が自由な職業になった」と言う。

彼は現在の体制を拒否することから始めた。そうでなければベンチャーではないとするのだ。その信念を貫き通すのが、いかに農村部で至難の業かは、これまで法人の設立とその活動を見る立場にいた私には、痛いほど理解できる。それが単なる「好き」とか「夢」では、どうにも実現される可能性

を持たないと言うことだ。「夢は持ち続けなければ叶う」と言う成功者の言葉を信じてはならない。力強い精神を保持続けねばならない。時には異端者と見られるポジションを維持する決意である。今の生活価値観をそのまま維持してのベンチャーはない。それでも、最低「好き」「夢」が心の底になければ、始めの一步はないと言う事への十分な考察と理解が必要になる。あまたの実践例が出版されている。こうやって成功したと言う個人的体験である。それぞれはそれぞれの個別事例で、あなたにそれが可能かは全く別のことであつて、場所・作目・周りの人の異なる事象に自在に対応しなければならぬのが「農業経営」の実体ですと言う。農業は総合的な知的産業なので、農業経営者が五感を使って対応するのと同様に相談する。場も作目もこれからのあなたのポジションに、すぐに、自己責任と言う言葉がヌーと姿を現す。単純に場を移動するわけではない。生活の全てをかけるのである。就農相談は、現場に近ければ、近いほど全人的な生活全体の相談になる。それまでの生活の全てをリセットしての覚悟が必要になる。

そこに農業・農村の実体が、断片的にしか都市部の住民に伝わっていないと思うのが最近である。現役の経営者でも、作るプロ売るプロを兼ね備える事の難しさがある。その中で田舎出身者はくせ者だ。

十年も二十年前の甘く、柔らかく包まれていた頃の家庭のイメージを持続して持っている。経営者として生産し、販売しての経済のやり繰りの苦労の経験がない、幼い頃の田舎の生活体験である。いつの間にか二十年前の自分に戻っての「農業をやりたい」の相談である。しかし、これもこれまで農村でしか生活してこなかった人とは全く別の視点を持っており、具体的な考えがある場合に注目しなければならぬ。



相談風景

一方、元々の都会生活者も変革を求めている相談者はくる。価値観の置き直しを決意しての決断である。一流会社の様々なアクシデンツがそれを裏付ける。自らでは何も出来なかつた悔しさが伝わってくるが、ものつくりとは別の難しさがあることの理解が必要なのだ。このことは、様々な考えを持つ多様な希望者に場を提供して、”とにかくやってみなはれ”が、彼ら・彼女らに一定のチャンスを与えるとする考えにつながる。各地

の自治体やNPOが動き始めたことで証明される。自治体の体力が落ち始めた現在、地域興しに動くNPOに希望をつないでいる。自ら判断してもらおう場の提供だ。そこに教育の生きた現場がある。

課題は、時間と自由と資金と価値観だ。待てない人が来る。人生の後半をこれまでとは異なつたあり方を探しに来て、懸けようとする人が来る。

多くの起業についての解説本のテキストは、「農業」に対応した特技は、活かせる経験は、資格は、適応性は、対応した資産は、精通した人脈は、家族の理解は、健康に自信はあるか、生活費を考慮しているか、行動はプラス思考か、と問いかけてくる。時間がどうしても必要になる。

各地で相談している相談員の話拾うと次のような言葉が並ぶ。就農地の決定について、住宅・農地の斡旋を手配する受け入れ先か、金銭だけの支援でなく、生活慣習を伝える就農地か、農業環境（農地・農業者・気象条件）が、自らの農業イメージの理想と現実をよく確かめる、やる気だけでは難しい、能力とやる気が求められる、一人では就農は難しい、始めは現役農家の半分所得が確保出来れば上出来、就農後順調にいつでも数年間の生活資金が不足、就農は社長になること。全て自己責任で従業員はいない。企画・販売・製造全て一人、農繁期は長時間労働、市町村・JA・普及センターも相談には乗るが助けてくれない、自分で相談に向き関係機関を活用することを知る、将来に向けての自分のしっかりした意思を持つ、計算では儲からない、しかし、農閑期には計画と分析を、意欲が先行し規模拡大を急ぐと技術が伴わず栽培に失敗、一人が責任を持つて最後まで面倒を見てくれる所を選ぶと、幅が広い全生活をチェックする眼が要求される。

これを整理すると、農地が見つかるとその農地で研修する。地域のプロ農家（お師匠さん）が指導する。作物選択も比較的作りやすいもので複数、収穫回数を多くし、リスクの分散を仕掛ける。自家消費の米は最低作る。年に一度の収穫はリスク大である。さらに生産と品質が一定レベルになると師匠の流通と一緒に流す。品質と売り方を学ぶ。しかし、これには時間と人手がかかる。まず、農地の情報である。分散錯圃を出来るだけ少なくしたくても、府県ではなかなかかなわない。その情報収集の人と時間が必要であり、地域の変化がある。加えて就農者資産の処理、住宅の斡旋、子どもの状況、奥さんの希望など、課題が山積し、関わる人も多く財政もかかるが、しかし確実である。

一方で確かな就農システムがあっても、”自由がない”のが希望者には壁になる。成功したシステムを押しつけるのが現場であり、囲い込みである。形にはめ込むことで成長を確保するのが王道。理解はするが、さて、これだけ混迷した世間で、いつまで成功したシステムが通用するか。実際に就農十年後、多くの新規就農者は時代に合せて経営内容を変化させているのが実体である。

いずれにしても、就農できることは、いかに多くの関係者との強い関係があつて成立したかを就農者が命すべき事である。

私は未だ探し求めている者であり、まだ、見つけられないでいる。結果をよりよくするためには、地域エゴを縮小し、農業の業態別を克服して、多くの新規就農者を実現した地域自治体の実践例を深く検討して、そこから手法を確立し、国全体としての新規就農者数を確保するというブランドデザインが必要だと痛感させられている。

新規就農者を受け入れた自治体の多くは、多少の課題はあるが、その成果に確信をもっているし、地域から喜びの声も聞こえる。その根本にあるのは、一種の絶望からはい上がろうとする自らの変身である。チェンジである。農村のあり方の変革と合わせて、そこには真に地域の行く末を考える卓越したリーダーがいる事は共通した事実だ。人間が住まない所には、何も興らないからだ。人間が中心だ。そこに教育し果たす可能性を見たい。

# 光を求めて



元北海道農業改良普及員 赤松 勉  
(機農高校三期生)

私は大正の末期に上川郡東川町に生まれ、その後東神楽町で青少年時代を送った。生家が水稲作の小作農で子供も多い貧困な農家であったから、父母や姉妹が大変な苦勞をしている姿を見て育ち、幼少より如何にして豊かな農家を創るかに心を満たし成長した。

当時の北海道農業は、上川の中心地として発達していたこの地でも主作の水稲は三、四年に一度の冷害を受ける悲惨さに加え、昭和初期には世界恐慌に襲われて米価も半値位に下がる大不況の中で、苦しい経済の農家は一家離散や浮浪者になるものが続出していた。

こんな北海道農業を救うべく黒澤西蔵翁などの先人が本道に適する酪農を確立しようと決意し、身を粉にしつつ無からその発展に身を注いだ。その偉大なる努力で当時は見る影もない貧困な地帯だった、根釧、宗谷、十勝などの地に酪農が大きく成長し、先進地の西欧にも負けない規模の酪農経営が発達したのです。そして、その基礎になったのは、酪農義塾（酪農

学園の前身)で、神を愛し人を愛し土を愛する心を育てながら、実践を通じて学ぶ大切な教育の場を創設し人作りを進めた事にある。

その当時の日本は厳しい軍国時代で、私達は一途に神国日本を守る為に生まれていると洗脳されており、私も出征し思いも及ばない敗戦となり我々の心は乱れた。

しかし幸いにも私には帰る家(農家)があり、故郷の山河が優しく変わらぬ姿と食のある温かい一家に迎えられ、心はずぐ落ちつき、そして戦争で疲弊した農業を早く再建しようとの気持ちが湧いて来たのです。

こんな時期に、早くも酪農学園機農高校が通信教育を開始したので、勉強すべく直ぐ手続きし、集合教育の場で野喜一郎先生の熱血あふれる講義を聞き農への感動を深めました。この事が、その後機農高校に入り農家指導の職場に進む途となって行ったのです。

機農高校での最初は、助手として栄光寮で河合寮長や二年生を中心とするみんなと共に農場や畜舎

で働き、そして寮全体が家族的な雰囲気運営されている中で、ひたすらに融和しながら聖書も読み真摯に一人立ちの生き方を求めています。そんな中、本科の三年に編入を果たし教科書の「生物」を手にした時、その巻頭に「生物には二大本能がある」との言を読んだ何故か体のふるえる感動を受けました。

この感動は敗戦後の不毛となっているものを振り払い、人として正しく生きる基本の会得でもありましたが、その心を強く磨いてくれたのが担任の大島捨松先生でした。先生はみんなが大学教授にもと感じる知識の深い先生であり、常に粋な日本語で話され講義をする得難い雰囲気があった。日頃は顔に厳しさが感じられ、会話は鋭く要点を突き曖昧さを正すので生徒の誰もが畏敬していた。

その実は非常に心の優しい生徒思いの先生であった。講義も解り易く真髓を説明しており「莞爾として笑う」との言葉を話す時には、先生の顔がその意味そっくりとなっていて、みんなは心から理解できたものです。

また後年に、二期生が作った記念誌「原始林」に、病気で学力が落ち卒業が心配な生徒を寮から自宅に養い特訓して助けた事や、卒業後に淋しい気持ちの人へ心のこもった便りを寄せた手紙の原文が載っていて、先生の心が胸に迫る。また、俺が死んだと伝えてく

れと卒業生へ伝言した事など感無量です。  
私は先生の講義をのがさず受けて、まさに「乾いた田に用水が注がれ次々と土が潤う」の思いでしたから、先生の自宅へもお伺いして教えを受け、先生から高価な和辻哲郎の「風土」や「ニーチェ思想の訳本」も戴きながら勉強したものです。だから先生の学期末試験で出された漢文「婦去來時」の暗記書取りが、殆んど出来て教えるに堪えていました。



三期生卒業記念写真

卒業後は農家の友として働くべく道立農業技術講習所を経て農業改良普及員となったが、この制度は敗戦後の農地解放と共に農村の民主化を図る新しい制度で急速に実施され、任命された普及員は殆んどが、その町村で農業指導関係にいた人であった。当時は食料難の時代で増産技術なども急速に進み、この指導を担う普及員への信頼は高く、更には人作りが進められた農村青少年4日クラブの活動も盛んで、まさに普及員活動の全盛期であり、普及員も自転車現地指導をして不眠不休と言われる働きで、道職員と言っても従来の役人とは全く違うのであった。この様な働きこそが、酪農学園が教える大切なものに通じるものであったと思う。

当時私は東旭川地区で技術指導の中心となり、町予算で行う試験展示圃事業を受け持った。その時に新しい水稲除草剤を考案して試験し、非常に良い効果が出て研究会の人達と使用に取り組んだ。何か道の知るところとなり原正市専技が調査に訪れ、翌年には同行していたメーカー技師の会社から「パムコン」という同じ成分の除草剤が売り出され、本道水稲除草剤のトップとなり大いに除草労力の軽減につながった。

また、転勤地の松山支庁乙部地区では、アスパラガス栽培が主体な作物がないかと、所内のみんな

と検討し、食用百合の栽培導入を普及所が主体で取り入れたのが、後を継いだ熱心な後輩の働きもあって乙部町の作物中でトップの生産額となった。昭和五十四年に「日本農業賞団体の部」に受賞して普及事業に名を残した。特に大切だったと思うのは、名寄地区で下川町の乳牛経済検定組合員を指導した時であり、若い十代から三十代前半の組合員が一生懸命に取り組み、すばらしい発展をした事である。

当時の下川町の農業は水稲中心であり、水稲が休耕、転作時代となると、彼等は出稼ぎに出て急速に営農意欲を失った。しかし、乳検に取り組む酪農の青年達は必死に努力したので、私の赴任した昭和四十八年当時から十年位の間に、戸数が四〇%も減少したのに牛乳生産量は倍以上となり下川農業の中心を担うようになった。

この乳検事業は希望寮で副寮長だった厚海忠夫（後に農務部長）氏達が始めた事業で、私は組合員の記録作成を手伝い、現地指導で実態にもふれ、成績発表や研修会を実施した。新乳検に入った酪農家の成績を精査し、コメントをつけ一覧表にして常に配布したので組合員の熱心さも増し、パーラーやフリーパンの牛舎を作り更に農業法人を作って、全町一丸の自給飼料主体の経営へと進んでいった。良質の基礎飼料として牧草、デントコーンに家畜根菜も入れた機農高よりの飼料体系を進めている。

彼等から乳飼費が他よりも下がっているとか、障害が少なく牛が健康だとか、牛乳の味が良い等の便りもあった。私は更に、糞尿施設向上が急務だと種々の資料など送りその発達を願っている。糞尿利用は土地を肥沃化させる基礎で、更に研究が進めばガス施設で酪農家に取り入れ易いものの出現も考えられ、畜舎や家庭に大きく貢献できると期待している。この事は河川浄化や省エネ対策になるから、国や道では更に積極的な助成をして早く推進をはかるべきである。

現在の日本は、敗戦で誓った平和な民主主義の心が進まず自己中心となり、産業は資源を浪費した使い捨てで、環境を悪化するばかりでなく人心を浮芸にして来た。

また、お金重視の経済は、貧富の差を大きくしながら都市に偏重し大切な地方を育てていないのだ。そのため経済変動のはげしい中で、企業の倒産、労働者の失業やリストラを招いているし、都市生活には偽も横行して安心と豊かさが失われ、家庭には親子孫へと続く人の世の尊さが忘れられつつある。それは食料を自給し農村をまもる先進国に対し、非常な遅れとなっている。

今こそ豊かな自然を守り、その中に生きて恵みある食を提供する酪農を、国民の心の糧として育てていかねばならない。黒澤翁の「豊かな自然に包まれる農こそ、健土、健民の泉であり、そして国

の力となり、その力こそ前途に光りある行く手を作る」との教えを大切にしていこう。

私は転勤先ですぐに農民に信頼され、その地に長くいる職員達に不思議がられたが、これは機農高での生活を通じて教えられた事が生きており、農家はいつも友であるとの思いが一般とは違うのかも知れない。農家より職員が偉いとか、上部機関の者が上だ、などと思う事は間違いで後進的なものだ。現場に努力する者にこそ発展と前進の原点がある事を強く悟らねばならない。

豊かな農村、潤いのある国造りの心を育てるものが、酪農学園の建学の精神「神を愛し人を愛し土を愛す」の教えにある。その心が人類社会に輝いて行くと信じている。



農場作業（デントコーン刈り）

会費・寄付金

この支援を賜り誠に有難うございました。感謝をこめ、お名前のご報告を申し上げます。

【敬称を略させて頂く失礼をお許し下さい】

会費

☆会社・農業団体

☆新篠津村農協、南トンデンファーム、見栄商事、鋼路丹頂農協、おかもろ農協、株栄美通信札幌支社、道央衛生、南インテリアアナガオ、植田製油、興部町農協、日本電子データム札幌センター

☆個人

金川幹司、山本博信、菊地正一、深谷正男、日野晃輔、市川舜、滝沢恵子、館清、長原登志子、下田尊久、阿部光雄、平棟孝志、津田佳吾

☆学園職員

麻田信二、原田勇、新谷良一

☆大学院・大学卒業生

江刺家光智(青森)、佐藤利博、川村祐介(岩手)、井戸端利明、猪狩重矢花(宮城)、鈴木士、鈴木佑(秋田)、伊藤みなみ、星野佳美、白石亮輔(山形)、藤館理孝、谷田部欣一(福島)、騰川和彦、手塚誠、平岡威、植木靖、伏見滋彦、米澤啓子(栃木)、吉田香、吉村正剛、太田屋進、川平兼司、川平若菜、及川敏孝(埼玉)、椎名紀夫、佐藤健三、岡田勉、島田隆男、熊谷茂(千葉)、市川みよ子、島影萌々子、御厨徹、鍋島邦治、高橋拓郎(新潟)、戸塚祐加、田村滋、清水俊樹(富山)、山内清治、大西博紀(東京)、奥村美、保田信一、熊本裕美子(富山)、長屋一二(石川)、鈴木卓郎、持鹿美乃、三輪尚士(静岡)、長根尾保夫、長根尾直子、伊藤留々奈、加藤正木、服部憲彦、神谷美砂代、田中健一、小林哲夫、間瀬朝夫(愛知)、田中佳秀、小倉章弘、前川誠(三重)、下野純一(京都)、鈴木寿代、田村敏則、加納実(大阪)、陸井義夫、神頭豊和、酒井博邦、陸井大三、平山素直(兵庫)、千川益生、芝一美(和歌山)、長井新、岡建一(岡山)、松井剣、森田芳治(広島)、那須正信(愛媛)、リース香織、富博明、井上昌俊、川崎喜正(福岡)、松崎秀保(長崎)、藤崎英廣、戸澤幸八、松山琢哉、松山西史子(熊本)、与那覇昌功、植田啓一(沖縄)、谷口眞子、長澤政明、小史都男、長井信之、玉利和弘、下川哲哉、鹿谷佳子、野村武、今井一雄、坂東克彦、岡本由美(石狩)、岩本真弥(後志)、藤瀬正幸、細田治憲、小林邦弘、八巻良博(空知)、小島洋昭、安藤廣、佐藤光一(渡島)、鈴木令子、木野牧人(留萌)、池田辰実(宗谷)、飯島勝、梶原綾乃、西脇功一、草刈直仁、荒木正俊、三浦敏司(十勝)、伊藤康宏(釧路)、船越衛(根室)、大原有紀子、白波瀬幸男、横沢香菜、多田健一、三浦克之、平塚博之、宮原俊之(網走)

☆短期大学卒業生

渡辺東四郎(秋田)、斎藤澄子(福島)、藤井豊史(埼玉)、長谷部和利(千葉)、岡本富雄、府金利廣、梶憲明(東京)、高森敏(神奈川)、森島広好(岐阜)、山上隆(兵庫)、川野直之(岡山)、宮本洋美(熊本)、加藤昭平、板倉敏雄、松原章夫、柴田有祐(石狩)、曾根良二(後志)、伊藤博明、細田治憲(空知)、水野照利(渡島)、草刈忠和(留萌)、中谷清敏、金曾千春、長沼勇(十勝)、伊藤智(根室)、小澤榮(網走)

☆附属高校卒業生

寺尾恵(神奈川)、野田謙一(長野)、森田克仁、大石卓月、梅野潔、中野昭(石狩)、宮本敏行(後志)、加藤要(檜山)、二瓶直司、佐々木誠、岸本源正、三好孝行、樋口健二(上川)、宮崎明(胆振)、小森唯永(十勝)、厚海忠孝(釧路)、高橋利雄、深尾昌晴、中山寿雄(網走)

☆三愛女子・とわの森三愛高校卒業生

中谷小百合(石狩)

☆大学院・大学在学学生父母

豊原益隆、武田達明、塩田吉雄、堀一、岡村雅夫、鶴山治、岩田隆則、黒川陽介、町田謙治、小原孝章、上原勇一、門間悦男、伊藤博、米澤正弘、成田光繁、本間哲夫、真田稔、飯塚幸男、脇坂義男、猪瀬純夫、仲本正和、栗原道春、林聡、石井一夫、藤野英明、青木俊則、笠巻裕司、森敏、岩泉聡司、谷口由乃、前原博道、伊東雅幸、千秋睦美、山越純、逢坂誠二、尾崎和子、平戸繁、上田浩市、福澤寛幸、宮崎真一、勝谷仁、佐々木秀明、中村恵、中村章久、佐々木馨、片桐晃、山田誠司、千葉武雄、山家実、岩垣正宏、丹治修、中崎聡、村上政行、三島孝二、松島賢博、佐々木義隆、永井郁雄、藤尾逸人、河内武史、太田健次、春口章、小原陽子、船久保功、石川芳信、篠原末治、内川博道、竹村和久、井上洋子、木野裕二、島田久子、武井陽一、松谷英一、森田一浩、東正明、戸嶋英敏、文倉恒夫、島崎芳晴、杉浦明、佐藤昭夫、森繁夫、岡崎隆、矢吹智之、吉田米満、榎義守、駒谷勉、須藤繁喜、山本剛士、寺門清一、吉田茂、井口俊、田淵忍、浦嶋哲男、川村真智子、酒井美千代、伊保俊彦、見田祥子、布施邦彦、村岡登、立花徹、中根恒雄、南明則、鹿取源一郎、田中利之、井上比呂志、猪瀬由美子

☆短期大学部在学学生父母

渡辺克夫、加藤康利

☆とわの森三愛高校在校生父母

長田浩司、永上和宏、馬場欣治、日諸英典、金澤はるみ、鳴海克浩、渡邊秀之、太等秀幸、錦織宣夫、田辺博行、茂庭謙、中園克之、大橋弥生、坂本尚、松金俊英、勝亦潤一、林賢治、奥山竜次、神谷章吾、上田貴子、伊澤純、渡邊真樹、西山勤、中村彰

☆寄付金

☆会社・農業団体

㈱ニッペイオマトリックス研究所、㈱ダム水源地環境整備センター、㈱機能水研究振興財団、協和発酵バイオ㈱、富田屋㈱、東レ・メデイカル㈱、三菱化学フーズ㈱、日本全業工業㈱、明治飼糧㈱、バイエル薬品㈱、生活協同組合コープさっぽろ、北海道農業施設協議会、㈱北海道酪農検定検査協会、東レ㈱、ファームエイジ㈱、㈱かみふらの牧場、田中製餡㈱、中部飼料㈱北海道工場、㈱ドーコン、日本甜菜製糖㈱総合研究所、㈱日本セルフ・サービス協会

☆個人・団体

宮田勇、福屋脩三、町村末吉、野田修平、麻田信二、菊地正一、岩館明美、小幡富貴子、細田治憲、永田享、大中原、後藤郁子、鈴木勲、平棟孝志、蘆立和徳、原田勇

☆学債償還寄附

足立憲一、久保清美、上甲好文、高木基、西脇友伸、橋本明雄、福井博幸、藤林義賢、児玉敏郎、佐々木康則、野崎龍、樋口豊、保井照江、三好惇二、浅田啓夫、飯森勝時、中村暢、橋口琢磨、美留町喜美代、山本公伸、仲本正和、矢崎恒忠、玉田雅史、志藤吉計、伊藤洋子、柿沼清志、澤田茂、瀧本和子、藤原久紀、皆上宏俊、谷礼子、房田弘、橋敏雄、五十嵐正晴、遠藤泰弘、北川道隆、志賀博和、菅見信善、水江泰造、宮坂善之、北野一郎、坂口巨弘、佐藤盛、塩釜孝、太田武司、神谷三起茂、杉原賢治、堀田義勝、本間章久、百瀬政富、山本秀隆、石塚昇司、古旗寛、新井康弘、南野尊隆、堀秋男、藤原一夫、中村正志、中村浩、羽賀宗博、増田常徳、山内隆、山本良典、荻原寿夫、佐野一雄、塚本和志、西川敏、橋本潔、道田一、大寄努、松下泉、植井晴夫、佐藤雄悦、義久仁孝、梅信二、佐藤利男、田本友広、長谷川大春、井上義明、海老原浩、西山雅彦、沼川光政、森保、井戸良悦、日出宏治、平澤照子、下斗米正敏、野中源隆、赤塚東司雄、小儀昇、木村泰博、唐木真澄